

地域の課題解決に貢献

みのり村(大分)

話題

2018. 1. 29

大分県日出町と杵築市で、障害児者施設や高齢者施設など13施設・20事業を運営する社会福祉法人みのり村(大木隆理事長)は、

1951年の法人設立以来、「利用者第一」のケアを進める一方で地域の福祉問題の解決にも当たってきた。住民の交通手段として介護タクシー事業を運営するなど、地域福祉の中核としての役割を果たしている。(井口拓治)

「礼拝は正法眼蔵」 大木英正・浜子夫妻が、(人が人を大事にするこ 51年に西日本初の知的障害児施設を開所したこ とが最も大切)を理念とする同法人の始まりは、と。仏の加護を祈り「み 日出町・報恩寺住職の故 のり(御法)園」と名付け

住民の足タクシー運営

直売所や交流サロンも盛況

られた施設の開設には、門徒や近隣住民の大きな協力があつたという。

同法人はその後、日出町で障害児者施設7カ所

・8事業、杵築市で障害児者施設4カ所・7事業、高齢者施設2カ所・6事業を運営し、利用者が500人を超えるまでに発展。そこには「成人した利用者のために働く場が必要」「高齢の利用者のために特別養護老人ホームをつくらう」といった

「利用者第一」の思いがあり、それを支えたのも

門徒や地域住民だった。実際、74年に開所した特養「菩提樹」は寄付金なしにできなかったという。

初めは、寺と門徒の色彩が強かった同法人と地域住民との関係だが、みのり園に小中学校の分校が設置され、合同の子ども会が結成されたり、みかん山の開墾を一緒にしたり、地域の祭りや美化活動に利用者が参加している間により強い絆になっていった。

同法人も地域住民の恩に報いようと、菩提樹で



社会福祉法人がタクシー事業を行うのは全国でも珍しい

20人が利用している。10年に行政から委託された配食サービスは、高齢者の希望に沿って朝食、昼食、夕食を毎日、菩提樹の職員が届ける形で実施。76人が登録しており、1カ月の提供食数は1400食に及ぶ。

交流サロンは、高齢者の引きこもり予防や認知症高齢者の居場所が必要という行政の依頼を受け、15年に開所。日曜と祭日を除く開館日には平均20人が訪れる盛況ぶりで、小学生と高齢者の交流の場にもなっている。

これらのほかにも地域に役立つ事業はある。特に障害者施設で作った野菜や果物、みそ、パンなどの販売や軽食を提供するカフェ・直売所は、食料品店や飲食店の少ない地域の人々の生活を支え、集いの場になっている。

公益事業について大木理事長は「タクシー事業は年360万円、交流サロンは年100万円の赤字。法人運営を考えれば厳しいが、みのり村は開設時から、地域に役立つことが使命だと思ってきた。恩に報いるのは当たり前のこと」と話す。

今後は、公益事業の赤字解消を進めるとともに、公益事業分の赤字を考慮した予算を立て、さらなる地域貢献を目指すという同法人。66年間で築き上げた地域住民との信頼関係、地域の福祉課題を解決する力は、地域福祉の中核を担う同法人の宝物となっている。



売店は地域の人の食生活も支える